
その先にあるもの

暁架

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

その先にあるもの

【Nコード】

N9533E

【作者名】

暁架

【あらすじ】

6大陸と王都そして空中都市の8つの大陸からなるこの国の頂点に立つのは、儂げな雰囲気醸し出す青年ティル。彼はこの国の最高位【王都魔法学園】の“総長”彼の最後の仕事は……。

第0輪

森に囲まれ少し小高い場所にそれはあった。

見るからに荘厳な石造りの建物、赤く染まる太陽を背にそれは建っていた…

一瞬、一枚の風景画かと思わせる程美しく

そして…

冷たく大きな墓石の様。

何処か孤独な雰囲気漂わせている。

先程まで赤く染まっていた空が次第に明るくなっていく。

静まりかえっていた空気が少しづつ動き出してきた、もう数時間もすればすべてがざわめきの渦に飲み込まれいくだろう。

太陽が空の真上に昇る頃、そこから物語りは始まる。

荘厳たる建物の少し外れた場所に小さいながらもどっしりと構えた門構えと、二階建てくらい白い洋館がある。

門を通り抜けると小さな薔薇のアーチが出迎える。

色とりどりの小さな薔薇達を通る者の目を楽しませ、微かな甘い香りが鼻を撫でる。

通り抜けた先には、黒檀で出来たような木の扉があった。その扉には申し訳そうな程小さな金のプレートが埋め込まれている。

そのプレートにはこう書かれていた…

“ 総長室 ”

甘いクッキーの匂いと温かい紅茶を飲みながら窓辺に立つ彼の左

胸には、ルビーで散りばめた6芒星の勲章が紅く輝いていた。

その勲章は総長である事の証でもある。この国は6大陸と王都そして空中都市の8の大陸で成り立っている。人種も様々で、大きく分けると6種族がこの国にはいる。人間、魔族、龍族e t c . . . 。そして、その8大陸を統率するのが王都である、その王都の中央にあるのが【王都魔法学校】である。

通称【魔学】は空中都市以外の全大陸に各1校づつある。【魔学】とは魔法、薬草学、魔法科学、政治e t c . . .

様々な分野に別れているがその中でも魔法学が一番特化しているの【魔学】と名付けられた。

【魔学】は只の学校ではなく王都に必要な人材を年齢問わず各村や街から集め、養成する場所。つまり、王都専用職員の養成所である。王宮勤務以外の専門職も【魔学】で資格を取らなければこの国では仕事が出来ないため、職種によっては気軽に入れてすぐ卒業も出来たりするので成人するための登竜門みたいな存在になっている。その【魔学】の頂点にたつのが“総長”と言われている。

王の次に権限を持つのだが…。

窓辺に立つ彼は言う、

「私が代わりに行こう」

少しの沈黙の末、彼はもう一度

「大臣、私が代わりに…」

「駄目ですぞ!!!」

言い終わる前に遮られた。後ろを振り向くと扉の前に緑色の長衣に包まれ、手にはお盆が握られているが、そのお盆はこころなしかプルプルと揺れている。

「大臣：私が行くのは」

「絶対駄目！です！」

怒り顔の大臣にまたも言葉の先を遮られた。

いつもの事なので彼はため息をつきながら、大臣の顔を見据える。

そして…

誰もが言葉を失う程の眩しい笑顔で彼は、
「ギザ大臣、今。人材不足なんじゃないの？」

時は遡る事、数時間前。

二階“総長室”からなんともやる気のない音が響いていた。

「ペタツ、ペタツ、ペタツ、ペタツ……」

そんな彼の元へ、知ってか知らずかいらたての紅茶が運ばれてゆく。

「コンコン、失礼します。… テイル殿少し休憩された方が良くと

…、

何ですかその膨れっ面は？」

扉を開けた先には、頬を膨れさせ何かの書類に印を押す彼は“テイル・ナ・ノーグ”この総長である。

そんな固い肩書きとは違いすらっとして、アーモンド型の緑色の瞳、白磁の様な白い肌に小さなサクランボのような唇、目を見はる用な美人と言うよりまだ幼さの残る…どちらかと言えば可愛い顔立ち。そんななか薄茶色の髪が無造作に伸びて華奢な薄い肩にかかる白の詰襟が彼の体の細さを一層強調しているが、左胸に添えられたまるで紅い華の様な六芒星の勲章が純白の中、血のごとく紅い輝きを放っていた。

彼の事を知らない者は彼を“窓辺に佇む白ゆりの様だ”とか、“儂げに咲く鈴蘭の妖精か”などと妄想を膨らす者ばかり。本来、総長室も王都の宮殿内にあつたのだから、妄想膨らます信者達が用も無いのにテイルの所に連日押し掛けるため多忙極まる仕事と信者共の相手をしていたテイルのだが、それを見かねた王がテイルのために離れの使われていない洋館を与えた事で更に、妄想信者共は萌えていた。離れの洋館は王のプライベートな敷地にあるため総長と王の許可証がないと行く事が出来ない。その為か、一人寂しく離れの洋館に住むテイルの所には毎日贈り物が絶えず送られてくると言う

…。
そんな儂い姫の様な扱いを受けている当の本人は。

「別にいゝ、私の仕事じゃ無いものも含まれているな、とか思っ
てないから大丈夫」

あっけらかんとした調子でだるそうに片肘を着いて欠伸をしていた
…。

ティルは紅茶を注いでいる大臣の方を見ると、

「…今、色々と大変な時期で人材不足なもんですから。それに、テ
イル殿がやった方がはかどる仕事しか持つてきてませんし」

こればかりはどうにもならない、そんな顔をしながら休憩の準
備が出来た事を椅子を引き、動きで知らせる。

ティルは持つていた印を元の場所に戻し甘い匂いのするテーブル
に着く。

「大臣、そう言えば君の所の孫が産まれたそうで。私から出産祝を
送ったのだけれど…届いたかい？」

注がれたばかりの紅茶の湯気の向こう側に目をやる。

「いえ、息子夫婦からは何の連絡もございませんが…。後程こちら
から確認してみます」

甘い匂いに包まれたお皿をテーブルに置く。

「そうか、まだ届いてないなら良いよ。結構、時間がかかるものだ
って言っていたからね」

そう言っつてティルは大臣が持つて来たクッキーを、一枚口に入れ
る。

紅茶の茶葉で作ったクッキーはほんのり甘く、サクサクしていて疲
れた身体には心地いい。

「今日は、先週摘んだばかりの茶葉をじっくりと乾燥させて、香り
が逃げない様に時間をかけ硬くならない様ピーナツバターを入れ
て焼き上げました」

お味の方はどう？とこちらを見る大臣に

「今日も美味しく頂きます」

満面の笑みでこたえる。

ギザ大臣はティルがまだ物心がつくつかないくらいの時から知っていて、彼のお菓子作りはその頃から始まっていた。

彼のお菓子作りの先生はティルの姉で、少しでも姉の作る味に近づけようと日夜練習にはげんでいるらしい。

そして姉の味を一番良く知っている私の元に持って来ているうちに、毎日の日課となり現在に至る。

何故、彼がお菓子作りに目覚めたのかは最近になって何となく分かってきた。

だがそれを彼に聞くつもりはない…。

彼には彼の、私には私の聞かれたくない事だつてあるのだから。

ほんのつかの間の休憩を堪能したティルは、窓辺に近づきながら高くなつた太陽を見上げる。

「ギザ大臣、例の件はどうなってる？」

眩しい太陽の光りに目を細め中庭に目を落とす。

「駄目ですね…一切の連絡もなし、音信不通。

一応こちらからも召喚状を持たせた官吏を何度か送つて居るのですが…」

そう言つて目を伏せるギザ大臣に紅茶のお代わりをもらつ。

「皆、廃人になつた状態で帰ってくる…。

又は夜な夜な何かを呟き怯える者も居ると聞く」

容れたての紅茶を一口

口に含みながら窓の外を見つめるティルを、ギザ大臣は心配そうな面持ちで見ている。

どのくらいいたつたのだろつ、唐突にティルは…

「私が代わりに行くよ」

少しの沈黙の間。

もう一度ティルは、

「私が代わりに……」

「駄目ですぞ！」

怒り浸透中のギザ大臣に遮られた。

「良いですか、ティル殿！」

今この国で大事な会議を行うためにどれだけの人が苦勞して……」

今度はティルがギザ大臣の言葉を遮る。

「そのおかげで人材不足。

今回、会議に出席する各大陸の代表者達の怠慢な態度、召喚状の無視。

日々送られてくる嫌味や罵倒のラブレター。

たまに過激な贈り物、今回の異例な会議も

全部私のせいだよ大臣。

こんな、若すぎるうえに無能で使えない“総長”が上に立つ事が許せないんだって。王を守るはずが守られている臆病者は要らないってさ」

先程とは違う冷めた瞳で自傷気味に笑うティルに、ギザは唇を噛み握りしめた拳に力がこもるのを感じた。

目頭が熱くなる

喉の奥が熱い

ティルに対しそんな事を平気で言える彼らに怒りを覚える。

「何を言っておられるのですか？」

貴方がこの国を護っているのとゆうのに……。

彼等に分かつていないのです。貴方が何故この洋館にいるのか！

何故、有能であるのに無能である振りをしているのか！

若すぎるのですと？

そんなことはない、貴方の今までを振り返れば

彼ら以上の人生経験をし、

彼ら以上の年月を経てこの国を見てきた、

“総長”とゆう立場に

貴方以上の人材はいません！

彼等が今

誰のお陰で生きているのかそろそろ……」

「ギザ大臣!!!」

ティルの声に我に帰る。

自分が今、何を言おうとしていたのか……

思い出としてはまだ重すぎる思い出に固い蓋が乗っかっている。

「大臣……。もう、

良いんだよ」

そう言っつて小さなハンカチを差し出した。

そのハンカチには見覚えがあつた……。

変な形のカボチャの刺繍。

遠い昔、ティルがまだ幼かつた頃、

その小さなハンカチに、不器用ながらも一生懸命にティルの好きな

カボチャの刺繍をしていた彼女の姿。裁縫だけは全然出来なかつた

が、将来のために頑張つていた彼女はいつも笑つていた。

ギザは知らないうちに悔し涙を流していた。

「いつかは辞めなければならぬ……」

只それが今ただだから、そんなに悲しまないで。それにいつまで

も他の代表者達を待たせておく事も出来ないし」

いつもの眩し笑顔でギザに微笑む。さっきの冷たい瞳の彼は何処に

もいない。

「ですが流石に一人で行かせる分けには……」

鼻水をすすりながらギザは答える。

すると、ティルは立ち上がりスタスタと執務室の扉を開けた。

其処には、長身で長い銀髪を緩やかに後ろで結び、切れ長の瞳はま

るで光の射さない海の様な深い碧、片手には数冊の本を抱え。今ま

さに扉を叩こうとした瞬間を開けられ、涼やかな瞳が眼鏡の奥で驚

いていた。

「じゃ〜ん! マーカス君です」

一体何事? そんな二人を他所にティルは、

「ギザ大臣。 彼が一緒に来てくれるから大丈夫！」
親指を立てて舌をペロツと出したティルの姿に、ギザは苦笑する。

第0輪（後書き）

こんにちは、暁架です。ここまで読んでくださる方がいるのか不安ですが読んでくださった方ありがとうございます（感涙）

まったくもって初心者です。まだまだ話がちゃんとまとまっていな
い感が滲み出ていたと思います・・・。

私も何かから何を書いていいのやらで（汗）

次から物語が始まりますので何かの縁あって次も読んで頂けたらと思っております。

第一輪

嵐の前の様な静けさだった。

目の前には大きな壁…。

いや、鬼の様な形相の

「そつ、そんなに怒らなくても…」

涙目で目の前の壁、いや銀髪長身のマーカスを見上げる。

綺麗な顔立ちで無言の威圧。普通ならあの切れ長の瞳で睨まれた

ら怖いハズなのだが…睨む相手が、

「ねえ〜マーカス〜

ごめんね〜」

上目遣いでへらへらと笑っている。思わず、

「ゴンツツ！」

静かな部屋に鈍い音が響き渡った。

「ヒドイ！」

殴ったあゝ、しかも一番痛い所で〜」

思わず手に持っていた本で殴ってしまった。殴られた本人は叫びながらどこかに行ってしまった。

「まったく… あいつは何を考えているのやら」

深い溜め息を吐き出す。

数分前の事。

借りていた本を替えそうとティルの執務室を訪れたのだが。

扉の前に立った瞬間、自動扉のごとく勝手に開いた。扉の先にはお盆を持ち潤んだ瞳でこちらを見るギザ大臣と、凄い笑顔でこちらを見るティルがいた。

そしてこつちを見ながらティルは何かを言っている。

「…はっ？」

奴が何か意味不明な事を言ったおかげで思わず聞き返してしまっ
た。

「だから、マーカス。君も一緒に行くんだよ」

「何処へ？」

「ん、緑の国？」

「誰と？」

「やだな、僕と一緒に決まってるだろ」

笑いながらマーカスの背中を叩く。

「いつ？」

「今からに決まってるでしょ」

「却下」

何を言っているんだこいつは…。

しだいにマーカスは頭が痛くなってきた眉間にシワがよる。

「えっ！ 何で？」

「当たり前だろ、こっちは暇じゃないんだ。

生徒達が私の授業を待っているんだから…何をやっている！」

いつの間にかティルの手が額の眉間に伸びていた、マーカスの身

長が高いせいかティルの手は目の前で行ったりきたり。

「眉間のシワ伸ばそうと思って」

いい加減マーカスも怒りが込み上げてくる。

普段、子供達で慣れているとはいえ相手が奴では話が違つとゆう

ものだ。

「で？ 何しに緑の国に行くんだ？」

目の前をフラフラしていた手がピタッと止まった。

そして、少し考えた後。

「…秘密」

「ゴンツツツツ！」

「いたあああ」

その日、王宮にまでティルの悲痛な叫びが木霊した。

「すみませんマーカス殿」

ギザ大臣のすまなさそうな顔が本棚の間から見えた。普段は緑色の肌が今日は青くなっている。

この国の種族の中でも数の少ない爬虫類の種族なのだが、肌の青くなった彼を見て珍しいものを見たと内思いながらマーカスは。

「…テイルなら先程、叫びながら飛び出して行きましたよ」

何種類かの本をパラパラとめくりながら目ぼしい所で印を付けていく。

「いえ、テイル殿はいいのです。私はマーカス殿に用があつてきたのですから」

静かな部屋に本のめくる音だけが響いていた。

マーカスの使っている部屋は大量の本に埋めつくされていて質素な作りになっているハズなのだが、小さなビルディングがこちらこちらにあり大変危険だったりする。

もう一つ部屋があるらしいのだが彼のプライベートルームのため、目隠しの魔法がかけられていて何処にあるか不明だ。

彼いわく、

「生徒達が私の居ない間に入ったら大変だろ？」

だそうだ。いったい何がどう大変なのか謎だ。

「…用件とはなんでしよう？」

下を向いたままそう訪ねる。そんなマーカスを見てギザ大臣は意を決意したかのように訪ねた。

「先程の話、聞いていらしたのですよ？」

「…何の事でしょうか？」

「テイル殿と私の話を聞いていましたでしょ？」

パラパラと本をめくる音が止み次の本が出てきた。またパラパラとめくりだしてゆく。

「…今回は緊急時なんです。テイル殿が行くと言い出した時は私も

驚きましたがティル殿の事を頼めるのは、今は貴方しか居ないので
す！どうかお願いします！一緒に行ってあげてください！」

本のめくる音は止まる事なく静かな部屋に響いていた。

「マーカス殿」

何の反応も示さないマーカスにギザが諦めかけて部屋を出て行く
うとすると。

「ギザ大臣。知っていましたか？」

ティルが以外と変な魔術を好んで使う事」

「…？ なんですと？」

マーカスの急な問いかけにギザが振り返る。

「…先程も余計な魔法が庭に足を踏み入れた瞬間にかけられました」
全部印を付け終えたのか本を何冊かにまとめ整頓していく。

「弾き返そうと思えば弾き返せるどうでも良い魔法でした」

ギザは整頓された本の題名になんとなく目をやると【下級魔法書・
下巻】、【魔方阵の歴史】など魔法学科の生徒達が持ち歩いている
本だった。

それが階級ごとにならべられていく。

「…マーカス殿？」

一体何をやっているのか？とゆう顔でマーカスを見ると。

「…その魔法は自分の声を拡声器みたいに遠くまで届けることの出
来る大衆向けの魔法なのですが、何を考えたのかティルはその魔法
に手を加えオリジナルの魔法を作ってしまった…」

大きな溜め息を吐き出す。

マーカスの冷たそうな瞳が真っ直ぐとこちらの瞳を捉える。

「詳細は後でアレから聞いときます」

その言葉を聞いた瞬間ギザの瞳が輝いた。

「もしや…引き受けてくださるのですか？」

マーカスの横一文字に結ばれた口元が、ほんの少し上上がるの
を見るとギザは喜びのあまりマーカスの手を取り踊りだそうとして
いた。

「…ですが、一つ条件があります」

ギザの動きがピタリと止まる。

「条件…ですか？」

一体どんな？そんな感じの不思議そうな瞳でマーカスを見ると。

「実は…」

と、言いながら耳元での密談。そんな様子を悔しそうに部屋の外で見ている者がいた。

「ズルイ…」

フグの様に頬を膨らまししながらそんな言葉を投げつけてくるのは、テイルである。

「何がだ？」

身支度を整えながらマーカスは言う。

「僕をのけ者にして二人で内緒話だなんて！」

腕組みしながらマーカスを睨む、が。

「大臣との個人的な話を何故お前に話さなければならぬ？」

「だって…、僕と一緒に行ってくれるってゆう話じゃないの？」

「一言も“行く”何て言っていないが…？」

そんなマーカスの言葉に二人のやりとりをはらはらしながら見ていたギザは。

「何ですと〜!？」

目を見開いて迫ってきた。その横でテイルは、そんなあくと言いつつながら必死にマーカスの腰にしがみつく。

「…それに、盗み聞きは総長として良くないんじゃないか？」

「はう!!」

「自分の頼みごとなら自分で私の所に来るのが筋だろう？」

マーカスの切れ長の瞳がテイルを捉える。

「はううう…」

後退りしながら少しずつ壁際に追いやられていく。

マーカスの瞳に捕まると誰もが怖がる。

いつものテイルならかわせるハズのあの瞳をかわす事が出来ない程だ。

「何か…怒ってるの？」

涙声でそう聞くと。

「何でそうなる？」

マーカスの目が途端につり上がる。

(こっ…、怖すぎる)

テイルが本能的に逃げようとしたその時、部屋の扉を叩く音に助けられた。

「失礼しますマーカス先輩・・・！」

なっ、何で貴様が此処に？」

入ってきた相手は、テイルを見るなり目を吊り上げて誰が見ても明らかに嫌そうな顔をし持っていた本でガードの姿勢。

テイルはというと入ってきた相手に向かっていつもの爽やかな笑顔ではなくて、何とも 獲物でも見つけたようなイヤラシイ笑顔で向かえ入れる。

「いや、久しぶりだねカロロン」

「カロロンではありません！」

カロロンです！」

憤怒の顔で訂正する。

そんな様子のカロンにマーカスは、

「……カロン、よく来てくれた」

カロンと呼ばれた青年はマーカスの元に近づくと改めて、

「お久しぶりですマーカス先輩。お元気な姿をまた拝見できて僕は嬉しいです。」

カロンの少し短めの燃えるような赤髪は少し癖があり所々うねうねしている。その赤い髪の下には力強い夜の空を思わせるような瞳。更にその瞳の中にキラキラの星でも散りばめたような熱い目でマー

カスを見つめていた。

「私の部屋に来てくれたということは、引き受けてくれるのかい？」
「もちろんです先輩！ 先輩の頼みごとなら火の中水の中だつて入つて見せます！ 僕が先輩に断りをいれるわけがありません！」

その熱い言葉を聞いてマーカスは目を細める。

「……それでは、ティル総長と一緒に買い物にでも行つてくれないか？」

「嫌です！」

即答だった。

「ちよつとカロロン少しくらい考えようよ」

今のは失礼だと言いなながらもニヤニヤしながらカロロンを見ていると。

「そうか…、無理ならば他の者に行つてもらふことにするか。大臣先ほどの…」

マーカスが近くに居たギザ大臣を呼び寄せ誰か代替りの者を探し
てきてくれないかとたのんでいた。その様子を見てカロロンは慌てて、
「まっ、待つてください」

三人が同時にカロロンを見る。

「確かに僕は先輩の頼みごとを断つたことは無いですが、今回は話が違います。…たかが買い物に何故僕と一緒に行かなければならぬのですか？」

マーカスの頼みごとなら何でも引き受けるがティル絡みならば話は別だ。しかも只の買い物ともなればそれなりの理由が欲しいところだ。

何故、僕だったのか。カロンの目が疑問と共にマーカスに向けられた。マーカスは静かに瞳を伏せて言う。

「…私はこれから少し旅に出なくならねばいけなくてね。その前に少し調べ物をしたいのだが何せ時間が無くて他の旅支度が出来ないんだ、その旅支度にはティルにも見てもらいたいものもあるし護衛もなしに一人で歩かせるわけにはいかないし、それに…」

私の買い物でもあるから魔術の知識がなければ魔具なども偽者をつかませられるかもしれないだろ？ 第一に私の中で信用している者であれば適任者だと思ったのだが無理ならば強制はしないが……」

どうする？ そう聞かれてカロンは考えた。強制はしない、だが君を信用しているのだとあのマーカスに言われてしまつてはノーとは言えなかった。

「…僕でよければ喜んで、お引き受けいたします」

第一輪（後書き）

小説で難しい…。読んでその世界に入りきれるように作るのは大変
難しいと思いました。汗

少しでも私の想像する世界を読んでいただいてる方にも思い描ける
ように頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9533e/>

その先にあるもの

2010年10月16日09時18分発行